特集

日本は戦時上海のユダヤ人を「救った」のか，それとも「見捨てた」のか
—海軍大佐・犬塚惟重の言動から—

関根　真保

はじめに

2015年2月，上海ユダヤ避難民の歴史に光を当てるニュースが中国で一斉に報じられた。「上海ユダヤ難民記念館（上海犹太难民纪念馆）」が「上海ユダヤ難民の歴史資料」を世界記憶遺産へ申請する準備を進めているというのである[1)]。これらの資料は，ナチスの魔の手から上海に逃がれてきたユダヤ避難民の記念品や写真，文書などを収集したもので，東洋がユダヤ人の離散の地になったという貴重な事実を伝えていた。この上海のユダヤ避難民はいつ上海にやってきて，上海でどのように生活したのだろうか。まずは以下の年表に沿って，その歴史を概説したい[2)]。

ドイツ・オーストリアからの上海ユダヤ避難民の歴史		
1938年11月9日	ドイツで「帝国水晶の夜事件」が発生 →　ユダヤ人が大挙して上海に渡航	
1938年11月24日	200名のユダヤ人を乗せた上海船の第一陣が到着 これ以降，月に数百人のユダヤ人が上海に渡航し，1939年半ばまでに1万人以上が上海で生活 →　**1939年4月，犬塚惟重が上海に派遣され，犬塚機関を結成** →　ユダヤ避難民は長い年月をかけて，ユダヤ人街「リトル・ウィーン」をつくる	「リトル・ウィーン」繁栄期
1941年12月8日	太平洋戦争開戦 →　租界が日本の占領下に入る →　**1942年3月，犬塚惟重が上海を去る**	

1)　以下の中国のウェブサイトを参照されたい。
http://www.chinanews.com/cul/2015/02-03/7031748.shtml,
http://news.ifeng.com/a/20150203/43090434_0.shtml,
http://sh.sina.com.cn/zw/hkzh/2015-05-29/detailzw-icpkqeaz5999830.shtml
なお2017年3月10日の時点で，筆者が世界記憶遺産の申請状況について記念館に問い合わせたところ，館員から「まだ申請の準備中」との回答を得た。

2)　上海ユダヤ人歴史研究に関しては，Dicker, Herman, *Wanderers and Settlers in the Far*

1943年2月18日	「上海ゲットー」の設置が布告され，ユダヤ人は3か月後の5月18日までに「ゲットー」内へ移動することを余儀なくされる →　経済的にもっとも苦しい時代を過ごす	「上海ゲットー」期
1945年8月	終戦で「ゲットー」が解放される →　終戦後ユダヤ避難民は，アメリカ合衆国やイスラエルへ移住	

ドイツ・オーストリアからユダヤ避難民が上海に大挙して押し寄せるようになったのは，1938年末である。ユダヤ人に対する暴力的迫害となった「帝国水晶の夜事件」が1938年11月9日夜に発生し，ドイツ全土で多数のユダヤ人が負傷し，殺害され，収容所に送られた。いつかナチス政権が倒れるのではないかと淡い期待を抱いてきたユダヤ人たちは，ここでついに国外移住を決意した。ところがアメリカ合衆国やパレスチナはすでに門戸を閉じていたため，当時「世界で唯一の無査証都市」であった上海が彼らの移住先となった。こうしてユダヤ人たちは月に数百人単位で上海を目指したのである。

彼らはドイツからの金品の持ち出しを禁じられており，上海ではほぼ無一文の状態であった。上海に縁故もなく，先住のユダヤ人コミュニティーに頼らざるを得なかった。居住地域も上海共同租界の中心部からほど遠い未開の地域で，物価や家賃の安い陽樹浦地区であった。そして，この共同租界東北部の陽樹浦地区は日本軍の管轄区にあったため，その後は，日本の政策に左右されることとなったのである。

しかし，先住のユダヤ人の中には，上海の中心部にオフィスや居を構え，経済界に君臨したサッスーン財閥などもいたため[3]，彼らの基金をもとに，生活の糧を得ていくユダヤ避難民も多かった。アメリカ合衆国のユダヤ人団体からは，苦境にあった上海の同胞を救うための援助資金が送られてきた。ユダヤ避難民の長年の努力も実って，彼らの居住区にはユダヤ教会堂のシナ

写真1　「上海猶太難民記念館」
筆者撮影（2017年3月10日）

East, New York, 1962 : David, Kranzler, *Japanese Nasiz & Jews*, New York, 1976. の二冊の大著が嚆矢となっている。中国では，潘光・王健『一個半世紀以来的上海猶太人』（北京，2002年），王健『上海的猶太文化地図』（上海錦綉文章出版社 2010年），国内では，阪東宏『日本のユダヤ人政策1939-1945』（未来社，2002年），金子マーティン『神戸・ユダヤ人難民1940-1941』（みずのわ出版，2003年），丸山直起『太平洋戦争と上海のユダヤ難民』（法政大学出版局，2005年），関根真保『日本占領下の〈上海ユダヤ人ゲットー〉』（昭和堂，2010年）などが挙げられる。

3)　上海には，中東を起源とするセファルディ系ユダヤ人が，1842年の南京条約締結以降に商人として進出してきた。セファルディ系の中には，その後アヘン貿易などで財を成し，上海の経済界で活躍することになる家族が，サッスーンやハードン，カドーリなど多数存在した。いわゆる裕福なユダヤ人であり，1938年以降にドイツ・オーストリアから逃げてきたユダヤ避難民とは立場が大きく異なっていたことを指摘しておきたい。

ゴーグを中心にして，商店，カフェ，レストラン，床屋，仕立屋などが軒を連ねるようになり，目抜き通の「舟山路」や「霍山路」の一角はいつしか「リトル・ウィーン」と呼ばれるようになった。ユダヤ避難民が比較的自由で穏やかに生活できた時代であって，ここでは年表に記したように，「『リトル・ウィーン』繁栄期」としたい。

ただし「リトル・ウィーン」が活況を呈した時代もそう長くは続かなかった。1941 年 12 月の太平洋戦争の開戦と同時に，日本軍が上海租界を占領し，イギリス国籍を持っていたサッスーンやカドーリなどの裕福なユダヤ人財閥は上海を去ることになった。アメリカ合衆国からの上海への資金送金もストップした。さらに追い打ちをかけたのが，1943 年 2 月 18 日に公布された「上海ゲットー」の設置である[4]。これは日本軍が治安維持のために設定した，およそ東西 2 キロメートル，南北 1 キロメートルのユダヤ人居住区であり，地域外のユダヤ人は 3 か月後の 5 月 18 日までに，住居を移さなくてはならなかった[5]。住居や商店などを手放すことを余儀なくされた避難民には，当然その後の経済的な困窮が予想された。日本警察の報告書も，「在滬猶太人総数ノ約一割ヲ占ムル店舗所有者並ニ企業家等ハ今次指定地区内移住ニ伴ヒ収入ハ従前ニ比シ約半減セルモノト推定セラル」[6] と記している。実際に「上海ゲットー」設置後のユダヤ避難民は，慢性的な食糧不足や不衛生な環境に悩まされた。もっとも苛烈な生活にあった 1943 年の冬には，「之等難民猶太人ノ生活状態ハ食フニ糧食無ク就職関係モ各方面ヨリ敬遠セラレシ職無ク最近ニ於テハ街路ニ進出（主トシテ公平路ヨリ西華徳路茂海路）ニ沿フ一帯ニハ約四百世帯ノ家族カ小店舗ヲ急造シ各自所有ノ冬物衣類食器等ヲ売却シテハ其ノ日ノ糊口ヲ凌ク窮状ナル」[7] という状況に陥っていた。ユダヤ避難民にとって「『リトル・ウィーン』繁栄期」とは対照的であり，本稿では上の年表に記したように，この困難な時期を「『上海ゲットー』期」とする。

それでも彼らは，苦難の生活を強いられてはいても，この極東の一都市において，なんとか戦時を生き延びることができた。その事実だけでも上海が重要な離散の地であったことを認められるし，その価値を広く伝えることが，中国による世界記憶遺産への申請準備の理由であった。ところが日本では，若干異なった受け止め方をされているようだ。この

---

4) 「上海ゲットー」とはユダヤ人の間で使われた通称である。ヨーロッパの「ゲットー」を想起したユダヤ避難民がこう称したが，日本軍は文書などでここを「指定地域」と記している。本稿では便宜的に当該地域を「上海ゲットー」とする。

5) 「上海ゲットー」内への移動を命じられたのは，1937 年以降にドイツ・オーストリアから移住してきた無国籍のユダヤ避難民だけであり，ロシア革命などから逃れてきたロシア系ユダヤにはこの規定が適用されなかった。その背景には日本とソ連との中立同盟が影響していたと考えられる。なお，セファルディ系ユダヤ人の多くはイギリス国籍を有していたため，太平洋戦争開戦後は日本の敵国人とみなされていて，多くがすでに上海を去っていた。

6) 『警察月報』1943 年 9 月（上海市档案館文書 R36-1-50）。

7) 昭和 18 年 11 月 16 日，在上海総領事矢野征記宛，在上海総領事館楊樹浦警察署長大東亜省警部高橋武次「難民処理委員会ノ対避猶新救済方策ニ関スル件」－「民族問題関係雑件／猶太人問題第 12 巻」（アジア歴史資料センター）Ref. B04013210000。

ニュースを日本で報じたのは,管見の限り,2015年4月の『日経新聞』と2015年8月の『産経新聞』であるが，この二紙の取り上げ方から，日本の上海ユダヤ人観の一端を捉えることができる。以下で，それぞれの重要な一節を引用し，いくつかのコメントを付したい。

まず,『日本経済新聞』の2015年4月19日「旧ユダヤ人街　上海の歴史紡ぐ」である。

> 迫害で国を追われたユダヤ人とって上海は一時，数少ない安住の地となり，その後は狭い区域で隔離生活を強いられた

> 米英など各国の租界には中国政府の支配は及ばず，商売はもちろん，ヘブライ語の学校設立や新聞・雑誌発行も認められて自由を謳歌。虹口区のユダヤ人街は「リトルウィーン」と呼ばれた。日本軍が上海を占領した1937年以後もそうした状況は維持された。だが42年7月，暗転する。ナチスの在日幹部が「最終解決」と称し，上海のユダヤ人の大量虐殺を日本に迫ったためだ。日本は拒む一方で，虹口区に「無国籍避難民隔離区（通称・ユダヤ難民ゲットー)」を設置。2平方キロ前後の土地に，上海のほぼすべてのユダヤ人を住まわせた。許可無く区外に外出もできず，木工や理髪など訓練をしながら自活したという

次に2015年8月9日の『産経ニュース』[8] も以下に引用したい。

> ユダヤ難民は旧日本軍が当時，上海北部の日本人居留区に「無国籍難民隔離区」を置いて保護した経緯があるが，中国側はこうした事情をほぼ封印し,「抗日戦争勝利70周年」の一環として，中国がユダヤ人保護に貢献したかのように国際社会にアピールする考えだ

> 記念館や「リトルウィーン」と呼ばれたユダヤ難民の住居やダンスホール，カフェなどが立ち並ぶ，当時としては自由を謳歌（おうか）したエリアの建築物改修を終える予定だ

> 42年，ナチス・ドイツが日本に「最終解決」と称してユダヤ難民の殺戮（さつりく）を迫ったが，旧日本軍はこれを拒否。43年に「無国籍難民隔離区」を置き，許可なく域外に出られない制限を加えてナチス・ドイツに説明する一方，ユダヤ人の生命を守った歴史がある

両紙とも「リトル・ウィーン」においてユダヤ避難民が文化活動などを謳歌したことを記し，比較的自由な時代が存在したことを認めている。また，その後の「上海ゲットー」

8)　http://www.sankei.com/world/news/150809/wor1508090004-n1.html

の設置に関して，ナチスが 42 年 7 月のユダヤ難民の殺戮を日本に迫り，それを拒んだ日本が「無国籍避難民隔離区」の設置で手をうったことに，両者とも言及しているが，この記述は疑わしい。この言説は日本でも諸外国でも独り歩きをしているが，それを裏付ける資料は一切ない[9)]。

両紙の見解が大きく別れるのが,「『上海ゲットー』期」の捉え方である。『日経』では「だが 42 年 7 月，暗転する」として，ユダヤ人が自由を謳歌した「リトル・ウィーン」の時代と「上海ゲットー」の時代を明確に区別している。しかし，『産経』では「ユダヤ難民は旧日本軍が当時，上海北部の日本人居留区に『無国籍難民隔離区』をおいて保護した経緯がある」として，「リトル・ウィーン」の繁栄が 43 年以降も継続していたかのように記述し，「上海ゲットー」を負の時代とは捉えていない。

さらに『産経』は「中国側はこうした事情をほぼ封印し，『抗日戦争勝利 70 周年』の一環として，中国がユダヤ人保護に貢献したかのように国際社会にアピールする考えだ」とするが，これこそが同紙の主眼であることが理解される。つまり上海ユダヤ人を救ったのは中国ではなく日本であるという。たしかに，場所は上海という中国の一都市であるが，ユダヤ避難民の多くは日本軍の管理区域で戦時を過ごしたことから，こうした見解が生まれるのも仕方ない。そして，これはなにも『産経』だけの主張ではなく，上海ユダヤ史研究でもよく語られていることで，検討に値する議論である。

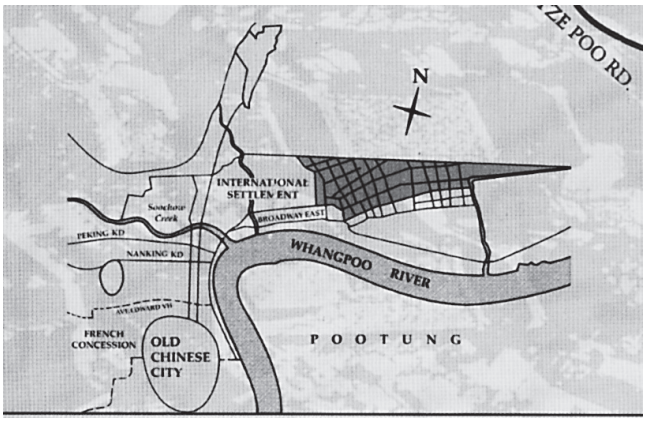

写真 2 「上海ゲットー」位置
出典：上海猶太難民記念館パンフレット

さらにこの見解を敷衍すると，日本はユダヤ人を殺戮しなかったばかりか占領下の上海にユダヤ人を居住させ，ドイツに留まっていれば失うことになった生命を「救った」ということになり，最終的には「日本はユダヤ人を『救った』国である」という言説となる。ユダヤ人を大量虐殺したナチスドイツと，ユダヤ人を迫害しなかった日本を二分化し，さらにはリトアニアで数千人のユダヤ人に日本通過ビザを発行した杉原千畝や，後に詳しく述べるが，ユダヤ人も諸外国人と同様に扱うと決めた 1937 年の「猶太人対策要綱」など

9) ナチスの SS 高官ヨゼフ・マイジンガーが 1942 年 7 月に上海を訪れ，ユダヤ人を虐殺するよう日本に迫ったという仮説がある。歴史家のマービン・トケイヤーが証言だけをもとに，著書『河豚計画』(1979 年）に記した叙述であるが，典拠はない。その後，この仮説を鵜呑みにした歴史書やユダヤ人の回想録などが多数刊行され，上海ユダヤ人絶滅計画が一般的に流布した。ただしこれには疑問を呈する歴史家も多く，いまだ解明に至っていない。

の事例を出すことで，以下のような風潮が現代でも広まっている。「日本帝国は，とにもかくにも何年かにわたってヒトラー・ドイツの同盟国であり，ベルリン・東京枢軸と呼ばれていただけに，当時の日本をみる目は時として厳しいものがある。しかし，日本の政治と軍の指導部はドイツの人種主義的な迫害妄想に同調したわけではなく，全体としてみれば，ユダヤ人を絶滅から救ったともいえることを指摘したい」[10)]。

こうした主張に大きく貢献したのが，本稿で取り上げる犬塚惟重（1890 ～ 1965）である。彼は海軍における「ユダヤ問題専門家」として 1939 年に上海に派遣され，当時の上海ユダヤ人問題を一手に引き受けた人物であった。当時をもっともよく知る犬塚が戦後，「日本の“アウシュビッツ”は楽園だった」[11)] というタイトルの論考を書いたことが，戦時の日本とユダヤ人との関連性をめぐる論考に，ひいては『日経』や『産経』などの記事に多大な影響を与えたと考えられる。

犬塚を語る上で広く伝えられているのは，「上海にユダヤ人の安住の地を作り出そうと尽力した『親ユダヤ主義者』であった」とする見解である。一方，上海派遣以前に反ユダヤ主義的な論考を次々と発表したことから，「熱狂的な国家主義者であり，ユダヤ人をただ利用していたに過ぎない」とも言われている。それならば，彼も「親ユダヤ」と「反ユダヤ」の狭間のグレーゾーンに立っていたと言えるかもしれない。本稿はこの複雑な犬塚惟重の言動を検討しながら，「日本は上海ユダヤ人を『救った』」と言えるのかどうかを考察する。また一方では，たしかに日本はドイツのようにユダヤ人を迫害することはなかったが，実際のところは厄介なユダヤ人問題を，ただ時間が過ぎ去るのを待っていたとも考えられる。その意味で，「日本はユダヤ人を『見捨てた』のか」をアンチテーゼとする。

Ⅰ　「日本の“アウシュビッツ”は楽園だった」

本章は先述の犬塚の論考を振り返り，彼が上海のユダヤ人の生活をどう捉えていたのかを考察する。戦後の 1961 年に書かれた「日本の“アウシュビッツ”は楽園だった」は，西洋に根付くユダヤ人迫害の歴史を概説し，それがナチスのガス室へと至ったことを批判することから始まる。その一方で，自分自身と彼の同士であった安江陸軍大佐[12)] のモットーは，「日本はあくまでも人種平等を建て前として，特定の一民族を排斥してはならない」[13)]

10）　ハインツ・E・マウル著，黒川剛訳，『日本はなぜユダヤ人を迫害しなかったのか』芙蓉書房出版，2004 年，2 頁。

11）　犬塚惟重「日本の“アウシュビッツ”は楽園だった」『世界と日本』1961 年 5 月号，新日本協議会出版部，57-65 頁。なお，この論考は犬塚の死後 1973 年にも，妻であった犬塚きよ子の了承を得たとして，雑誌『自由』1973 年 2 月号に発表されている。小見出しが若干変更されているだけで，本文の内容は同じである。

12）　安江仙弘は「ユダヤ問題専門家」として，犬塚に並び称される人物である。犬塚が上海に派遣されていたのと同時期に大連に派遣され，旧満州のユダヤ人対策を担っていた。

13）　犬塚惟重前掲論文，60 頁。

として，それが 1938 年 12 月 6 日の「ユダヤ人対策要綱」の策定につながったとする。この「ユダヤ人対策要綱」とは，人種平等の精神からユダヤ人を特別視せず，日本や日本占領下の上海や満州への入国に際しては，彼らも他の外国人と同じように扱うというものであり，戦時日本はユダヤ人を「救った」と主張する人々の間で称揚されている日本の指針であった[14)]。

次に彼の論考は「安住の地，上海」や「平和な収容所風景」などの見出しを付して，ユダヤ避難民の生活風景に言及している。先住のユダヤ人コミュニティーの援助にすがるしかなかった避難民については，「上海には阿片戦争以来永住している極東屈指のユダヤ富豪らが中心になって欧州ユダヤ難民共済委員会が結成され，当時日本租界と称された共同租界内虹口側すなわち我が海軍占領地区内に避難民収容施設を作って，あたたかく迎えてやった」としている。日本占領地区に迎え入れたという点はたしかに事実として認められるだろうが，それが「猶太難民救済委員会」の尽力であることは，犬塚も記しているところである。さらに彼はこう続ける。

写真 3 「リトル・ウィーン」のユダヤ人
出典：関根真保『日本占領下の〈上海ユダヤ人ゲットー〉』2010 年，昭和堂，表紙

「鉄条網の収容所ではない，耐火煉瓦二階建のガッチリした建物で大広間に数十人づつではあるが，各家族別にベットを与え，カーテンでしきりをして，多い収容所で約七千名，小さい所でも二百名近くのユダヤ人が自由に生活できる快適な収容所が六ヵ所にあり，別に子供の多い家庭は収容所内に家を持たせて生計補助をする。そのほか，施療の病院，伝染病院，産院，幼稚園，小学校，職業補導設備，ユダヤ教寺院，墓地までも用意された」。

こうした記述から，「リトル・ウィーン」と称されたユダヤ人街が想起されるだろう。同時に，同胞から食料を支給される様子は，「思い思いの入れものをかかえたユダヤ人が並んでいる様は，炊き出し風景同様である」と記され，どこかのどかな雰囲気を示す風景の一部として扱われている。その後は，「生活力の旺盛なユダヤ人のことだから，間もなく救済委員会の貸付をうけて小商売をはじめ出した」と，ユダヤ人が生活の糧を得ていった事実を示している。さらに犬塚は，日本人とユダヤ人との関係について，「人種排斥などを生来知らない日本人らは，一種の名物街の見物ぐらいの気持ちで陽樹浦に出かけては，ユダヤ人レストランでお互いに片言英語で交歓している風景がみられ，はてはユダヤ娘を

14) ただし「猶太人対策要綱」が有効であったのは，太平洋戦争開戦までである。日本が上海租界を占領した後の 1942 年 1 月に策定された「時局ニ伴フ猶太人対策」では「猶太人対策要綱」を破棄すると明示している。つまり「上海ゲットー期」においてはこの要綱は適応されていないことになる。

上海妻にしたり，正式に結婚して日本につれ帰る有情多感な青年もあらわれるにいたった」と，良好な関係性を強調している。

このように犬塚の記述は，ユダヤ避難民の生活をあまりに有閑に描いている。殺戮の脅威から命からがら逃げだし，新天地で必死に生きるユダヤ人の切迫感はまったく感じられない。ことさら「リトル・ウィーン」を強調しているようではあるが，日本がこうした場を提供して，「あたたかく迎えてやった」というのが彼の主張の根幹である。こうした犬塚の考え方はどういった背景から生み出されたのかを検討するために，次章では彼の経歴を詳しく見ていく。

Ⅱ　上海派遣以前

犬塚の生涯に関しては，上海時代に彼の秘書を務め，のちに妻となった犬塚きよ子が戦後に『ユダヤ問題と日本の工作』（日本工業出版社，1982 年）という著書を刊行し，彼の思想や行動を詳細に描いていることから，世にも広く知れ渡っている。彼女によれば，犬塚がユダヤ研究を始めた契機はシベリア出兵であった。追われる白ロシア系にも革命軍の赤軍にもユダヤ人が多いという「ユダヤ人の二面性を体験した犬塚は，地中海海戦以来の使命感をユダヤ問題の研究に託することに見いだした」[15] という。その後は日夜研鑽を積み，海軍内でユダヤに関する講演などを行ったとされる。そうした彼のユダヤ人観は 1936 年創刊の『国際秘密力の研究』で確認できるが，これがいわくつきの雑誌であった。

写真 4　犬塚惟重海軍大佐
出典：犬塚きよ子『ユダヤ問題と日本の工作』日本工業出版社，1982 年。

というのも『国際秘密力の研究』は，シベリア出兵を経験した軍人たちが反ユダヤを綱領として 1936 年 2 月に結成した「国際政経学会」[16] の機関誌だったからである。シベリア出兵時には，ユダヤの世界征服の方法を記した陰謀の書『シオン長老の議定書（プロトコール）』[17] が当時のヨーロッパを席巻しており，日本の陸海軍にも赤化対策として配布された。その影響を受けた軍人たちが帰国後に，ユダヤの脅威が日本にも襲い掛かりつつあると，反ユダヤ主義を狂信的に喧伝したのである。もちろんユダヤ人と直接接触のなかった日本ではユダヤ人を特別視する風潮などなかったが，一部でこうした観念的な反ユダヤ主義が，軍人や知識人に受け入れられていたのである。

15）　犬塚きよ子『ユダヤ問題と日本の工作』日本工業新聞社，1982 年，68 頁。

16）「国際政経学会」に関しては，関根真保『日本占領下の＜上海ユダヤ人ゲットー＞』（昭和堂，2010 年）の 111-116 頁を参照されたい。

17）　この文書は執筆者も執筆年代も明らかではなかったが，ロシアの反ユダヤを宣伝するために用いられた。1930 年代に偽書であることが判明している。

「国際政経学会」は理事長に貴族院議員の赤池濃を据え，当時の反ユダヤ主義のリーダー格であった四王天延孝陸軍中将が顧問を務めた。実質的に運営していたのは常務理事の増田正雄であったが，機関誌の第一号『国際秘密力の研究　第一冊』（1936 年 9 月 3 日）を繰れば，犬塚惟重も重要な立場にいたことがすぐに理解される。この雑誌は創刊に際し，最初に「発刊の辞」を載せ，次に「猶太問題を再認識せよ＝非常時対策の根本問題＝」という題目で，読者に向けてユダヤ問題の重要性を 18 ページにわたり説き続けているが，これを書いているのが犬塚惟重である。ペンネームの「宇都宮希洋」で書かれたこの論考は，ユダヤ人の脅威が日本人に認識されていないことを憂い，吉野作造らのユダヤ禍否定論者をユダヤ人の宣伝に騙されているとし，またユダヤ人利用主義者に対しても，そんなことをしていれば自身が飲み込まれてしまうと一蹴する。そして，「終りに本書掲載のプロトコールを熟読玩味せられん事を切望して已まない」[18] として，会員の長谷川泰造による日本語訳『シオン長老の議定書（プロトコール）』を読めば日本人の認識も深まることを説いている。

さらに犬塚は「本稿は初冊でもあり多少問題を遡らせる必要上と，同人等の予見と現在の状勢を清鑑に供する関係上，過去に於て公表したものを再録した」として，数編の論考を掲載している。ここでは内容には触れないが，そのタイトル――「支那幣制改革の隠れたる指導勢力」「猶太問題より見たる日英関係―日英提携可能なりや」「西班牙人民戦線の思想的指導勢力　フランマソン秘密結社」「独逸の再軍備問題」「フリーメーソン秘密結社の概説」「外交の裏を行くマソン策略の表面化―コミンテルンの新戦術」――からだけでも，彼の思想の一片を読み取ることができるだろう。創刊号の論考は全部で 16 編あったが，そのうちの 6 編が彼のものであったことからしても，犬塚はただの一会員などではなく，「国際政経学会」の重要な論客であったこと，ひいては生粋の反ユダヤ主義を代表していたことが理解される。『国際秘密力の研究』はその後も年刊で刊行されたが，上海に派遣される 1939 年まで犬塚の論考はつねに掲載された[19]。さらに犬塚は 1939 年に『猶太問題と日本』[20] というタイトルの大著を刊行しており，これも反ユダヤ主義的な記述であふれかえっている。

このように犬塚がユダヤ人の脅威を説き続けていたまさにその時に，ナチス占領下のユダヤ人が上海に大挙して逃げてきた。しかも彼らは日本海軍の警備区域に居住するように

18）　国際政経学会『国際秘密力の研究　第一冊』1936 年，XXIII 頁。

19）『国際秘密力の研究』に掲載された犬塚の論考は以下の通り。『第二冊』――「日本の経済的思想的内部崩壊を目標とする　支那を第一線とする抗日経済戦の進展　欧米猶太財閥の対支協動大投資計画」，「西安クーデター事件の裏面」，「指導勢力フランマソン秘密結社（完）」，『第三冊』――「仏蘭西愛国団体の警告　第二次世界大戦が起る　日本人も之を読め！」，「陰惨なるスターリン独裁と相剋地獄の正体暴露は何を示す乎　第一の政策は何か」，「国際猶太財閥の支那経済制覇　まさに完成せんとす」，「猶太勢力の動向より見たる　北支問題の予想」，『第四冊』――「支那事変は猶太問題を暴露す」，『第五冊』――「世界的反猶運動激化に対抗する猶太の国際的策動」。

20）　宇都宮希洋『ユダヤ問題と日本』内外書房，1939 年。

なったことから，日本にとっても対岸の火事ではなくなった。難民処理という現実問題を担うために，海軍が上海に派遣した人物が，「ユダヤ問題専門家」としてすでに名を馳せていた犬塚惟重だった。上海武官府に勤務した犬塚の上海時代は次章で詳しく述べたいが，ここから彼は上海のユダヤ人指導者と直接的な折衝を重ねながら，ユダヤ避難民たちの新天地を築くことに尽力した。日本軍警備区にユダヤ人を「あたたかく迎えてやった」ことが，自由を謳歌できたユダヤ避難民の「リトル・ウィーン」の時代につながった。このことから，犬塚を命の恩人とみなすユダヤ人さえいたのである。

これだけの評価を受けてきた犬塚にとって，反ユダヤ主義的思想を公表した 1936 年から 1939 年初頭までの「国際政経学会」の時代は，記憶から消したかっただろう。ところが戦後になって，イスラエルでこの時代が問題となる。1982 年 8 月 15 日の『朝日新聞』が報じた記事「犬塚少将は味方？敵？」[21] によれば，「戦時中，上海のユダヤ人難民の担当者だった犬塚惟重海軍少将（1965 年死去）がユダヤ人の味方だったか敵だったかという論争が，イスラエルで起きている」[22] とされている。

この論争の原因は，1941 年に「在米ユダヤ聖職者同盟」の代表フランク・ニューマンが犬塚に贈ったシガレットケースが，エルサレムのホロコースト記念館「ヤド･パシェム」に寄贈され，遺品として永久展示が決まったことにあった。そのシガレットケースは，神戸のユダヤ神学生を上海に受け入れたことなど，これまでの上海での犬塚の功績を称えて，贈られたものであった。当記事はまず，ドイツから来たユダヤ人を「日本陸軍が迎え入れ，上海の海軍警備地区の犬塚機関が住居と食料を世話した。難民の数は約三万人となっており，犬塚機関がそれだけの生命を救ったのは事実である」と記し，犬塚の功績を明示している。

一方，この犬塚の顕彰に対して疑問を投げかけたのが，ヘブライ大学のアルトマンとクランツラーの両博士であった。犬塚が上海派遣前に「反ユダヤの論文を書いている」こと，著書『ユダヤ問題と日本』の中で「世界征服の計画書」として『シオン長老の議定書』を紹介していることを理由に，「ヤドパシェムに作品を並べる資格はないと述べた」のである。同時に『朝日新聞』は，上海時代以前の思想は不問にしてもよいのではないかとする，ヘブライ大学教授のベン・アミー・シロニーの以下の言も掲載している。「犬塚氏は反ユダヤ的本を書いている。しかし行動としては欧州からのユダヤ難民を上海の日本人地区に受け入れるのに努力した。私はアルトマン博士と違い，ユダヤ人を救ったという事実の方が，ずっと重要と考える」。犬塚の位置づけがいかに困難であるかが理解されるが，次章では犬塚の上海時代におけるユダヤ人への功績を具体的に検討したい。

21）犬塚の最終階級は海軍大佐であり，「犬塚少将」の記述は誤りである。

22）『朝日新聞』1982 年 8 月 5 日夕刊。

Ⅲ　上海時代

1939年4月，上海に押し寄せるユダヤ避難民の問題に対処するために，犬塚機関が設置された。それは犬塚にとって従来の観念的な反ユダヤ論では通用しない現実問題だった。本章では，これまでの思想と比較しながら，犬塚の上海時代の新たな構想を考察する。

犬塚機関の方針は，上海派遣にあたって立案された「上海対猶方策案（1939年2月2日）」から理解できる。主なものとして，「サッスーンなど上海のユダヤ人財閥に対して，日本と協力することで得られる利益などを伝えることで，親日，日本依存に転向させること」，「極東ユダヤ資本の興亜政策への投資に誘導するための研究調査」，「極東ユダヤ人の英国依存を日本依存に転向せしめる工作」などが挙げられている[23]。彼の方針は反ユダヤからユダヤ人利用へと展開していった。

その具体策が上海に安住の地としてユダヤ人コロニーを作り，その見返りとしてアメリカのユダヤ資本を引き出そうとする計画である。上海ユダヤ避難民の現況調査のために，犬塚は陸軍，海軍，外務省共同の「現地調査会」[24]を作り，1939年7月7日に，「上海ニ於ケル猶太関係調査合同報告」[25]を提出している。その報告書では，「欧州避難猶太人ノ居住区設定ニ関スル基礎的研究並調査」として，ユダヤ難民を上海あるいはその他の地域に受け入れることを協議し，ユダヤコロニーの大きさなどにも具体的に言及している。

犬塚はさらに，東洋製缶ニューヨーク出張所員の田村光三を仲介役として，米国のユダヤ首脳との提携策も探っている。「日本側は虹口に在住するユダヤ人を含めて三万の避難ユダヤ人居住地区として，上海浦東を与える。これに対し米国ユダヤは二億円のクレジットを設定し，うち千二百万円は避難ユダヤ人の失業対策として皮革会社をつくり，残りの一億八千百万円は日本の希望する物資，屑鉄，工作機械，石油等無制限に供給する」[26]というものであった。これらの計画は，中央の反対や日本とドイツとの接近によって実現しなかったが，犬塚惟重がこうしたユダヤ工作を試みていたことは見逃せない。

同時に上海時代には，犬塚の論考が『国際秘密力の研究』から急に姿を消している。論考を発表する余裕などなかったとも考えられるが，『国際秘密力の研究　第六冊』の次の記述にあるように，犬塚の上海での行動は明らかに「国際政経学会」の反感を買っていた。

> 此の際吾等が特に一般の注意を喚起したい点は，所謂対猶政策の問題である。動もすれば猶太利用論や協調論が述べられてゐるやうであるが，凡そ対猶政策を一定の方向に釘づけにすること程危険なことはない。猶太政策は先づ「問題の真相」を識ると共

23）　犬塚きよ子前掲書，95-96頁。

24）「調査会」のメンバーは，海軍が犬塚惟重，陸軍が安江仙弘，外務省が石黒四郎であった。

25）　外務省外交資料―民族問題雑件／猶太人問題　第四巻，アジア歴史資料センター（Ref. B04013205200）。

26）　犬塚きよ子「ユダヤ人を保護した帝国海軍」『自由』1973年2月号，242頁。

に，「皇道日本に背馳する行動は断乎反撃し是れを解し是れに服すれば，即ち是れを容る」ことにある……単純な利用論や協調論は自ら進んで秘密力の術中に投ずるものである。国家的危険是れより大なるはない[27]。

ここでいう「利用論」が犬塚の構想を指しているのは明白である。「ユダヤの陰謀」の脅威を繰り返し強調してきた「国際政経学会」にとっては,「利用論」などはユダヤ人の「国際秘密力」の術中に陥ることになる。そのためユダヤ人の「現実的政策」を重視した上海時代の犬塚は,「国際政経学会」の論客たちとは完全に袂を分かっていたと推察される。こうした動向をもとに，犬塚を「親ユダヤ」と位置付ける言説もあるが，そうだとするならば彼のユダヤ人に対する言はいささか過激である。

日本の占領下にユダヤ人の居留区をつくることで，日米関係の悪化を避ける，あるいはアメリカのユダヤ資本を利用するという考えはもともと旧満洲で構想され,「河豚計画」と呼ばれていた。ユダヤ人は危険であるが，食べてみると美味しく，利用しがいがあるという意味で捉えられているが，この「河豚計画」という言葉はもともと,「ユダヤ民族への認識が不足する日本」を警告する犬塚の発言の中に見られる。1939 年 1 月 18 日「上海猶太ノ現状ニ関スル私見」の犬塚報告の一節を見たい。

現状ニ於テハ危険ヲ予期シテモ之ヲコチラニ利用シナケレバナラヌトイフ状況デアル丁度河豚料理ノヤウナモノデ，食べレバウマイガ，料理法ヲ心得テ居ナイト生命取リトナルノデ，其ノ料理法ヲ常識的ニ普及サセナケレバナラヌ[28]。

犬塚は河豚に譬えたユダヤ人の特異性を認識することが必要であると説き，彼らを「利用」することを直接言明している。さらに，彼はユダヤコロニーの必要性に関して，もっと過激な言を用いて,政府に提起している。これも「上海ニ於ケル猶太関係調査合同報告」における上海時代の犬塚の言である。

此ノ問題ノ実質的意義ハ次ノ三点ニ在ル。即チ第一ハ之ニ依リ猶太民族ヲ牽制スルコトデアル要スルニ目下我ガ海軍地区ニ在ル約一万人ノ猶太人ハ彼等カラスレバ一種ノ人質デアル。第二ハ今後猶太民族指導者ニ対シ之ヲ交渉ノ切リ札タラシメルコト第三ハ此ノ問題ヲ通ジテ日本ノ正当ナル態度ヲ彼等ニ理解セシメルコトデアル[29]。

---

27) 『国際秘密力の研究　第六冊』,「編集後記」1940 年 4 月。

28) 外務省外交資料―民族問題雑件／猶太人問題　第十三巻，アジア歴史資料センター（Ref. B04013210300）。

29) 外務省外交資料―民族問題雑件／猶太人問題　第八巻，アジア歴史資料センター（Ref. B04013207700）。

こうした「人質」や「河豚料理」などという文言からすれば，やはり彼を「親ユダヤ主義」というよりも，「ユダヤ人利用主義」と位置づけざるを得ない。ただし，ユダヤ人との直接的接触を避けられない上海では，「ユダヤ人を利用する」という犬塚の信念の方が，現実問題に合致していたのは間違いない。当然ではあるが，上海のユダヤ人対策を一手に引き受けた彼の言説は，上海の日本人が持つユダヤ人観に大きく影響を及ぼしたし，要人が上海を訪れるときなどは彼の構想をアピールする絶好の機会であった。たとえば，文学者の加藤武雄は 1939 年に上海を訪れたときに，陽樹浦のユダヤ人街の様子を以下のように記している。

> 猶太研究家として知られてゐるＩ大佐から，対猶太の意見をきいた後，私共は楊樹浦にあるその集団寄宿舎を見に行つた。大きな建物で，焼き立てのパンが山をなしてゐる共同炊事場があり，レントゲンの機械など据ゑつけた診察室もある。部屋々々には，まだ解かない大鞄なども積まれてあり，老若男女が手持無沙汰らしく，廊下を，庭を，右往左往してゐたが，その青い眼には，流石に流離の淋しさが浮んでゐた。さまよへる猶太人！　日本の対猶太策には，かなり極端な対立があるやうだが，此の生活力の強い民族も，これからつくられる世界史に，かなり重要な一役として働くであらう事は争はれ無い[30]。

日本から上海を訪れる要人は，「Ｉ大佐」こと犬塚惟重と「リトル・ウィーン」をまわり，上海のユダヤ人問題を話し合ったことであろう[31]。加藤の言にも「日本の対猶太策には，かなり極端な対立があるやうだが」とあり，日本における「国際政経学会」の「反ユダヤ論」と犬塚の「ユダヤ人利用論」の相違を示唆している。また，当時上海で唯一の日刊邦字新聞『大陸新報』にも犬塚の影響を受けたと思われる記事を探すことができる。

> 上海には約二万の猶太人が生活してゐる。如何に彼等を取扱ふかといふことは重大な政治的経済的問題である。上海の猶太民族は市民総数に比較して多数ではない。併しその経済的活動及び彼等が持ち込んできた種族的雰囲気は上海人にとつては看過できない。猶太人の増加は単に市中に商人や小カフエーが相当数増加するに過ぎないと考へるなら之れこそ大きな誤りである。楊樹浦地区の多数の猶太住民は緩慢であるがしかし確固たる足取りで歩，一歩と支那商人を圧迫してゐる……猶太問題と言へばフリーメーソンや，その世界撹乱の陰謀が云々されるのであるが従つて猶太研究家は概ね神ガカリになつてゐるのであるが上海に於いては，もつと，生きた猶太人問題が提

30)　加藤武雄「上海その他」『上海』石濱知行他，三省堂，1941 年，144-145 頁。

31)　加藤のこの上海訪問には同じく文学者の豊島與志雄が同行しており，彼もその時の様子を論考に，「このユダヤ人問題の衝に当つてるＩ氏は，彼等の固有の伝統的生活を立派に営ませてやるつもりだと断言された」と記している。（「上海の渋面」『上海』，107 頁）

起されてゐる。これに対する現実的対策を我々は必要としてゐるのである[32)]

1942 年の 7 月に書かれたこの「上海の猶太人問題」というタイトル記事によれば，上海のユダヤ避難民が徐々に上海経済に入り込み中国人を凌駕しつつあるという。日本では「国際政経学会」によってユダヤ人のフリーメーソンや世界撹乱の陰謀への脅威が伝えられているが，ユダヤ人と直接的接触のある上海ではそうではない。「現実的対策」，つまりユダヤ人の経済的台頭が上海では問題なのだとする。この記事は著名がなく，犬塚もすでに上海を去っていたため，執筆者は判然としないが，「現実的な」ユダヤ人政策という犬塚の考え方が上海に根付いていたことを表しているだろう。

上海時代の犬塚は論考を残していないし，新聞への署名付きの投稿もなく，上海時代の彼のユダヤ人観を窺い知ることは困難である。ただしそれを示唆する記事は『大陸新報』に存在している。1940 年 2 月 7，8，10，12 日に 4 回にわたって連載された「欧州戦争とユダヤ人の動向」というタイトル記事である。執筆者は，犬塚惟重ではないが，「新明清」と明示されている。当時の犬塚機関には女性の秘書が一人いたが，彼女はのちに犬塚の妻となり，戦後になって「犬塚きよ子」の名で『ユダヤ問題と日本の工作』を著した。彼女の旧姓が「新明」であったが,「きよ」に「清」の漢字をあてれば「新明清」となり，いかにも男性が書いたようになるだろう。犬塚が書いたのか，あるいは秘書本人が書いたかは定かではないが[33)]，筆名からこの記事が犬塚の思想を代弁しているのは間違いない。記事の内容は，欧州大戦以降のヨーロッパユダヤ人の動向と，ナチス・ドイツの反ユダヤ政策に関するものであるが，上海へ逃げてきたユダヤ人に関しては，こう伝えている。

表
歐洲戰爭とユダヤ人の動向
新明清
JOHNNIE
上海畫廊
開設

写真 5　神明清の署名入り記事
出典：『大陸新報』1940 年 2 月 10 日

欧州から追放されたユダヤ人の行方は？　世界唯一の無査証港上海のみが自由に彼等を迎へる地である楊樹浦には既に一万一千名の避難民が収容されてゐる，元来が東洋民族たる彼等としては気候風土，文化等すべて東洋の地に憧れをもつてゐただけに，上海に流入し，日本の力に依つて生命の安全を保護されることに絶大の喜びを示して

32)　『大陸新報』1942 年 7 月 24 日夕刊。なお，この記事は「国際政経学会」の機関誌『猶太研究』の 1942 年 9 月号にも転載されている。『猶太研究』は『国際秘密力の研究』(1939 年の第六冊が最後) を引き継ぎ，1940 年から月刊誌として刊行されることになった機関誌である。ただしこの転載記事で興味深いのが，『猶太研究』には「猶太問題と言へばフリーメーソン」以降がごっそり抜けていることである。都合の悪い部分は省略しているのだろう。

33)　新明きよ子は秘書時代に，多忙な犬塚のために，彼の口述筆記を行っていた。また，宇都宮希洋著の『ユダヤ問題と日本』も犬塚の論考を集めて，彼女自身が執筆したと証言している。

いる[34]。

「元来が東洋民族であった」ユダヤ人が憧れの地の上海で，日本に保護されていることを強調している。そして，この哀れなユダヤ民族に対し日本のとるべき措置に関して，こう続けている。

> 今哀れな彼等に温い救ひの手をさし伸べたことは他民族は敵と信じてゐた彼等にとつて驚くべき恩恵であり，日独防共同盟を以て日本も亦，排猶政策国であらうと思つてゐただけに身を以つて，まつろひ来たれば百年の仇敵さへも許し，包容する日本の真価を経験したのである……民族的大危機〔欧州戦争を示している―引用者〕に直面して，その指導者等が覚醒し東洋民族の盟主日本へ衷心からの協力を誓はんとしつつあるのは，亡国のユダヤ民族のために喜ばしい現象である。同時に彼等と接触の機会多き大陸日本人も彼等の心情を理解し，八紘一宇の大民族精神で指導する責務を有するであらう[35]。

「まつろひ来たれば」という文言は，犬塚の論考や講演などに散見される独特の言い回しであり，これが犬塚のものであることは確実視される[36]。ユダヤ人が日本に「従うならば」，日本は彼らを許し，抱擁し，それによってユダヤ人が日本人に「衷心からの協力を誓う」というのである。この主張から犬塚の上海での目的，つまり「上海のユダヤ人が日本に恩恵を感じ，親日本に傾いてきたことをアピールすること」，「ユダヤ人を日本の指導のもと『八紘一宇の精神』で包容してやること」を理解できる。ただし，犬塚のユダヤコロニー案は結局，1940 年 9 月 27 日の日独伊三国軍事同盟でアメリカとの連携が途切れることで，水泡に帰することとなった。そして彼は太平洋戦争開戦と同時に，現役復帰を命じられた。犬塚の上海時代もここに終焉を見ることとなった。

Ⅳ　ユダヤ人側の視点から

前章までは，犬塚自身の思想や言動を検討することで，彼のユダヤ人へのスタンスが観念的な反ユダヤ主義思想から現実的なユダヤ問題への対峙へと移行してきたことが理解できた。しかし，彼の言動を追うだけでは十分な判断とはいえない。やはり，ユダヤ人側が

34）『大陸新報』1940 年 2 月 10 日。

35）『大陸新報』1940 年 2 月 11 日。

36）この「まつろわす」という文言も，「河豚料理」「人質」とならんで，犬塚の思想を明確に表すキーワードになるだろう。新東亜建設者の責任として，日本の指導下にユダヤ人を帰順させ，彼らの蒙を啓く必要があるというのである。1939 年に書かれた『猶太問題と日本』の中における「彼等が前非を悟りまつろひ来たるまで，我々はうまずたゆまず努力する」（424 頁）という一節からも，日本がユダヤ人を「まつろわす」方針が，上海時代以前からの持論であったことが理解される。

犬塚をどう捉えていたかという視点も含める必要があるだろう。

ところが，当時の上海ユダヤ避難民は，日本に対して複雑な立場にあった。日本の警備区域に居住した彼らは,自分たちの運命を握っている日本を頼りにせざるを得なかったが,実際のところ，その日本は自分たちを迫害してきたナチス・ドイツの盟友であった。ナチスと同じ政策を日本が採るのではないかという恐怖がつきまとっていたのである。彼らは日本に対する「抵抗」と「協力」の狭間であるグレーゾーンに位置しており，犬塚に対する視点に関しても，このグレーゾーンを考慮する必要があるだろう。

犬塚の上海での役割は，ユダヤ人コミュニティーのリーダーたちと交渉しながら，避難民の生活を運営していくことだった。その上で，ユダヤコロニーを設置し，上海のユダヤ人を親日に近づけるために奔走した。犬塚きよ子は著書の中で,「犬塚が機関長としてまずじっくり懇談したのはユダヤ難民問題についてセファルジム・ユダヤの指導者アブラハム翁とその長男ルビー・アブラハムである……ルビーはのちには年齢の近い犬塚大佐を『マイ・ブラザー』と呼ぶほどに人間的に理解しあってゆく」[37] と記し，犬塚とユダヤ人がいかに懇意にしていたかを強調している。また犬塚本人も 1942 年に上海を後にするときの光景を,「私は涙をいっぱいたたえたユダヤ首脳部の見送りを受け，彼らの前途を案じながら上海埠頭に決別した」[38] と語っている。しかしこの犬塚とユダヤ人の関係性についても，犬塚側からの見解だけでは，やはり根拠として弱いのは否めない。

ただし，ユダヤ人のリーダーたちが犬塚に親しみを感じていたかどうかは別として，実務的な指導者として彼を頼りにしていたことを窺わせる資料は現存している。ユダヤ避難民が当時運営していたドイツ語新聞『上海ジューイッシュ・クロニクル *Shanghai Jewish Chronicle*』に掲載された 1940 年 11 月 24 日の記事「ユダヤ人問題に対する日本の立場」[39] である。犬塚は 1940 年 11 月に現在の NHK にあたる東京放送局で上海のユダヤ人の状況に関するラジオ演説をおこなったが，その東京での演説は上海のユダヤ人コミュニティーも注目していた。本記事はまず犬塚を紹介するに際して，こう評している。

> 日本海軍，外務省，興亜院が関わるユダヤ人問題の責任を一手に引き受けている犬塚機関長は，先頃，東京において長時間にわたるラジオ放送の演説を行った。ここでは犬塚機関長の個人的な意見が述べられたが，もちろん日本官憲の見解を表明するものでもある。犬塚機関長は上海において，ヨーロッパで故郷を追われ，上海に避難先を求めざるを得なくなった我々ユダヤ人の精神的かつ物質的苦悩に強く共感してくれている。当然ながら，彼はユダヤ民族の誠実な友であるのだ。

グレーゾーンにいるユダヤ避難民の複雑な立場もあるだろうが，自分たちの苦悩を共感

37） 犬塚きよ子前掲書，96 頁。

38） 犬塚惟重前掲論文，64 頁。

39） Japans Stellung zur Judensfrage, “*Shanghai Jewish Chronicle*”, November, 24, 1940

してもらっているという点で，犬塚に対する絶大な信頼が理解される。犬塚の意見が日本政府と合致することへの期待感も見え，犬塚との良好な関係を築いてきた彼らの努力も窺える。本記事はその後に，「ユダヤ人問題に理解を示す犬塚の姿勢が，演説で鮮明に打ち出された」として，日本が採るユダヤ人対策に関して，以下の三点を伝えている。

第一は，日本が人種平等の精神でユダヤ人に接していることが挙げられている。犬塚によれば，日本軍は民族平等という精神に基づいて，ユダヤ難民に安住の地を与えたとする。そして，ユダヤ人もすでに東アジアを新たな故郷とみなし，人種平等と宗教活動の自由が日本人の基本原則であることを認識し始めたと，犬塚は考えている。

第二は，上海経済に関するものである。これも犬塚によれば，日本とユダヤ人の企業との不要な競争を防止するために，日本当局が必要な措置を講じており，こうした対話によって相互理解が推進されているとする。

最後に，元来が東洋人であるとするユダヤ人の起源に言及されているが，犬塚はこう断言する。今日ではシオニズムの例にあるように，ユダヤ人の間で「東方回帰」という傾向が顕著に見られている。その中で日本はアジア民族を幸福へ導くという使命と責任を負っているが，ユダヤ人も東アジアにおける新たな平和と秩序に十分に貢献している。

「アジアの盟主である日本が東洋人のユダヤ人をあたたかく迎えている」ことをアピールする犬塚の言であるが，ユダヤ人にとってその起源の真偽などは重要ではなかった。日本がナチスと同じように自分たちに牙を向けさえしなければ，それでよかった。そういう意味では，ユダヤ避難民が頼りにできるのは犬塚だけだったし，彼のこういった言説は充分に評価できたのだろう。

おわりに

ここまで犬塚惟重における，前期の「反ユダヤ主義的な思想」と後期の「ユダヤ人との共存の構想」との二面性を考察してきた。さらに後期の「構想」も「親ユダヤ」というよりも，「ユダヤ人利用主義」的観点からの行動であったことも理解された。この二面性を考慮する歴史家は，犬塚に対して，おおよそ以下のような評価を下している。

> 犬塚がユダヤ人に対してつねに好意的だったかどうかは，評価の分かれる点である……犬塚が難民に対して威圧的であったなど，ユダヤ人一般の受け止め方を考慮しなければならないことはもちろんだが，彼が官憲，軍関係者の中でユダヤ人に理解を示した数少ない日本人の一人であったことは明らかであり，彼がひきつづき上海にとどまっていたら，その後の事態もだいぶ違っていたであろうと考えられる‥‥‥上海のユダヤ人は，少なくとも犬塚大佐に対しては特別の思いを抱いていたと思われる[40]。

40）　丸山直起『太平洋戦争と上海のユダヤ難民』法政大学出版局，2005 年，182 頁。

犬塚がねらっていたのは，先回りしてユダヤ人の力をうばい，武力で弾圧しなければならなくなるのを回避することである。上海にいたかれはその目的を達成するために行動した。犬塚は何よりもまず熱狂的なナショナリストだった。戦後かれは自分は反ユダヤ主義者であったことはないと否定した。しかし，神より与えられた日本の使命というものを心底から信じていたことと，狂信的排外主義者であったことを否定したことは一度もなかった[41]。

つまり，犬塚の「ユダヤ人利用主義」や「ナショナリズム」が，結果として上海の「リトル・ウィーン」の繁栄につながったのであり，ひいてはこのことが，ユダヤ人を「救った」という言説にもなるのだろう。ユダヤ避難民は上海に逃げることで，結果的に生き延びることができたという事実は，彼らが過去を述懐したときの，以下のような複雑な心情にも直結している。

日本に残酷な仕打ちを受けていた中国人の怒りは充分に理解できる。しかし，ドイツのユダヤ人絶滅計画を聞き知ったとき，私の日本に対する，そしてゲットーに対する感情は変わってきた。誰も日本人に感謝などしていないが，幸運にも私たちが上海に移住することを認めてくれたのは日本人だったのだ。もしそのままヨーロッパに残っていたならば，今ここで生きていることはなかったであろう[42]。

「〔日本とアメリカの戦闘を目にして―引用者〕当然，私たちは星条旗を掲げたアメリカ軍戦闘機の勝利を祈った。日の丸をつけた戦闘機が撃ち落とされると，何とも言えない高揚感を覚えたが，実際それは不都合なことであった。皮肉にもユダヤ人を守っているのは日本軍であり，生きるためには日本に頼るしかなかったからだ」[43]。

どちらも日本に対して「協力」と「抵抗」の狭間のグレーゾーンに立つ心境を表している。日本に頼らなくてはならないが，その日本はドイツの同盟国であり，脅威の対象でもあった。つまりユダヤ避難民が戦後になって，ホロコーストを免れたという結果を振り返るときでも，感謝するのは上海に逃げてきた運命であり，日本ではなかった。憧れの対象も新たな移住地として目指したアメリカ合衆国にあった。日本は彼らにとって，上海という場を提供した国であり，ナチスと同様の人種的迫害をしなかった国であって，それが結果的に功を奏したに過ぎないのである。

41） デイヴィッド・グッドマン，宮澤正典著，藤本和子訳『ユダヤ人陰謀説』講談社，1999年，205頁。

42） Sigmund Tobias, *Strange Haven : A Jewish Childhood in Wartime Shanghai*, Urbana and Chicago, 1999, p.103.

43） Evelyn Pike Rubin, *Ghetto Shanghai*, New York, 1993, p.141.

しかも，日本の管轄区に多くが居住したといっても，そもそもユダヤ避難民を上海に受け入れたのはイギリスが運営した上海共同租界であった。また，上海のユダヤ避難民の生活を成り立たせたのは，先住の同胞ユダヤ人の資金援助であり，アメリカ合衆国からの送金であった。日本が「リトル・ウィーン」を作り出したわけでもなかった。それどころか日本はのちに「上海ゲットー」を設置して,「リトル・ウィーン」を危機に陥れたのである。

筆者はかつて著書『日本占領下の〈上海ユダヤ人ゲットー〉』の中で，犬塚の論考「日本の“アウシュビッツ”は楽園だった」が，「上海ゲットー」とナチスの絶滅収容所を比較することで「上海ゲットー」の凄惨なイメージを軽減しているとして，以下のように論じた。「犬塚の言説は，『快適な収容所』とか，『安居楽業』とかいった言葉で上海と絶滅収容所との連関を断ち切っていながら，『日本のアウシュビッツは楽園だった』というタイトルを使い，『上海ゲットー（指定地域）』をナチスの絶滅収容所とまたも対比させている」。そして，「上海ゲットー」は「絶滅収容所」ではなく，あくまでヨーロッパの「ゲットー」と比較しなくてはならないと強調した[44]。ところがその後，自身のこの記述に疑問を抱き始め，いつか犬塚の言動を再考したいと考えていた。本稿を執筆した所以である。

その疑問点とは，犬塚の論考が「上海ゲットー」を想定していたかどうかということにある。というのも，「上海ゲットー」は犬塚が上海を去った後の 1943 年に設置されたことから，そもそも犬塚の論考は「『リトル・ウィーン』繁栄期」だけを描写したのではないかと感じたからである。犬塚は「上海ゲットー」時代に関して，「後任者は全然ユダヤ問題にタッチしなかったので，陸軍側嘱託の言を入れて，ドイツふうにユダヤ人に黄色い腕章をつけさせたというが，さすがに特別な排斥弾圧もなかったとみえて」[45] と触れるに留まっている。つまり犬塚は自身が去った後の「上海ゲットー」については何も知らなかったのではないかと推察される。

そもそもユダヤ避難民の間だけで称された「上海ゲットー」という言葉自体も，犬塚は知らなかったのではないだろうか。彼が死去したのは 1965 年である。文献としては 1976 年に，デヴィッド・クランツラーが著書『日本人，ナチス，および上海 *Japanese Nasiz & Jews*』の中で「上海ゲットー Shanghai Ghetto」を用いたのが最初ある。さらに日本では、1979 年にトケイヤーの著書『河豚計画 Fugu Plan』が日本語に訳されて、「上海ゲットー」という言葉が周知された。それならば犬塚の「日本のアウシュビッツ」には,「上海ゲットー」を想定するといった深い意味などない。「リトル・ウィーン繁栄期」の時代に「ユダヤ避難民を上海にあたたかく迎えてやった」といっているに過ぎないのであろう。本稿が「はじめに」の年表で，上海ユダヤ人の歴史を二期に分けた意図はここにある。つまり犬塚の論考，あるいは犬塚の言動から，日本はユダヤ人を「救った」と結論付けることは，「『リトル・ウィーン』繁栄期」の「歴史を切り取って」いるにすぎない。犬塚が上海以前の反ユダヤ主義的論考を顧みずに，みずから「親ユダヤ主義」と述べること，あるいは彼をそ

44） 関根真保前掲書，72-73 頁。

45） 犬塚惟重前掲論文，64 頁。

う評価することも同様である。

しかし，現代に生きる私たちは幸いにも，すべての歴史を通した上海ユダヤ避難民の歴史を理解できる。彼らが「リトル・ウィーン」で生活を謳歌できたことも知っているし，ここまで積み重ねられた研究成果から，悲惨な状況にあった「『上海ゲットー』期」のことも知ることができる。自活の可能性を奪われたユダヤ避難民は，アメリカ合衆国からの資金援助も滞ったことにより，日々の食事もままならなったし，不衛生によるチフスやコレラの流行によって，死亡率も高まっていたからである。「歴史を切り取って」，日本はユダヤ人を「救った」とか，「見捨てた」とか，一言で論じるのは簡単であるが，それよりもやはり，歴史を通した慎重な議論が求められる。その意味で，グレーゾーンを論じること自体が，正当な歴史評価にも通底すると考えられる。

（せきね　まほ・立命館大学）